



## 東野圭吾とエドガー・アラン・ポー

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-10-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀江, 珠喜 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00006067">https://doi.org/10.24729/00006067</a>

# 東野圭吾とエドガー・アラン・ポー

堀 江 珠 喜

「F大学の合格発表の日、掲示板に自分の受験番号を発見した時の喜びは、僕のこれまでの人生でも、ベストテンぐらいには入る幸福な瞬間のひとつである」（「嗚呼、花の体育会系」1994）と述べる大阪府立大学工学部出身の東野圭吾は、現代日本のトップ・ミステリー作家である。その理系的知識と発想力ゆえに、いわゆる文学少年・少女上がりではない理系読者層をも新たに開拓し獲得し続けている。東野は1985年に27歳で江戸川乱歩賞を受け、プロ作家として本格的に執筆を始めたのだが、比較文学的視点からは、乱歩よりむしろエドガー・アラン・ポー的資質がうかがえる。なるほど『浪花少年探偵団』（1988）のタイトルは明らかに乱歩の「少年探偵団」シリーズを意識してつけられている。だが乱歩自身、シャーロック・ホームズ・シリーズのベイカー・ストリート・イレギュラーズにヒントを得て少年探偵団を描いたのだし、いっぽうドイルはホームズとワトソンの活躍を書くにあたってポーの探偵小説を手本としているのだ。そこでこの論文では、東野圭吾におけるポー的な要素について考えたい。

東野はエッセイ「読ませる楽しみ 読まされる苦しみ」（1994）で高校入学直後の彼自身と、江戸川乱歩賞を受賞した小峰元の『アルキメデスは手を汚さない』を携えた長姉とのやりとりを次のように記している。

だが当時の僕は、江戸川乱歩という名前さえ全くしらなかった。そこで長姉に訊いてみた。彼女は自信たっぷりに答えた。

「推理小説を広めた帰化人で、本名はエドガー・アラン・ポーや」

ふうんそうかと、僕は感心して頷いた。救いがたいアホ姉弟である。

とはいえ作家の告白を鵜呑みにできないのは、文学研究者の原則である。第一、長姉の子供時代は「少年探偵団」の連続テレビドラマが少年少女たちを夢中にさせ、東野が通った小学校にも児童向けの江戸川乱歩著作本があっても不思議ではなかったのだ。いくら本嫌いでも子供の間で話題になっていたはずである。従ってこのエピソードは自虐的笑いを提供する作家のサービス精神によるものと理解したい。なにしろ東野の『悪意』（1996）においてもそうだが「偽りの手記」手法はミステリーの常套手段ではないか。

それはともかくポーは推理小説の始祖とみなされ、だからこそ平井太郎はこの名をもじってペンネーム江戸川乱歩を用いたわけだが、ポーの文学はより幅広い。ゴシック的怪奇小説も書いているが、ポーはまたSF小説の始祖とも言われている。そしてこれらとはまったく趣を異

にしたファルス（笑い話）や文芸評論も高く評価されている。事実、三島由紀夫はポーのファルスのような作品を目指して、短編小説「卵」を書いたほどだ。またポーは詩人としても才能豊かで、マラルメはポーを読むためだけに英語を学んでもいいと思うほど感動し、実際、英語教師となりポーの詩を仏訳した。ちなみにポーの散文を仏訳したのはボードレールであり、耽美性という共通の資質がこの『悪の華』の詩人にうかがえよう。

これほど文学において多才なポーだが、東野においてはどうか。『仮面山荘殺人事件』（講談社文庫、1995）の解説で折原一は東野について「いろいろな種類の引き出しをたくさん持っていて、そのすべてが魅力的」で「こちこちの本格推理から、犯罪心理小説やサスペンス、SF風の作品まで、さらにユーモアもシリアスも何でも書いてしまう才能豊かな作家」と述べている。これがまさにポー的なのである。では具体的にその例を挙げてゆくことにする。

### 〈モルグ街の殺人〉

「モルグ街の殺人」（1841）はポーの最初の推理（短編）小説で、探偵役のオーギュスト・デュパンの能力と活躍ぶりを「私」が語るという形式はドイルのシャーロック・ホームズ・シリーズに受け継がれている。東野においては、一人称小説ではないが、ガリレオ・シリーズの物理学者・湯川学とその友人で警察官の草薙俊平コンビは、ポーの原型を連想させる。『予知夢』（文春文庫、2003）の解説で三橋暁は草薙をワトスン役と評しているが、このホームズの友人をポーの作品まで遡るとデュパンの相手役の「私」となるのだ。

さて東野は、ポーの作品でもとりわけ「モルグ街の殺人」にこだわっている。『名探偵の呪縛』（1996）でも密室殺人事件の一例として「モルグ街の殺人」を挙げている。特筆すべきは、通常の邦題には「モルグ街の殺人」と「モルグ街の殺人事件」があるのだが、東野は前者を採用していることだ。なぜなら彼の連続殺人事件を扱った『学生街の殺人』（1987）なる言葉がポーの読者に「モルグ街の殺人」を連想させ、またその通り「モルグ」という名の酒場を中心に物語が展開されてゆくのだ。モルグとはフランス語で死体置き場を意味する。ずいぶん不気味な店名だが、「毒笑」、「怪笑」や「黒笑」を自著タイトルにつける東野らしいブラックユーモアが感じられる。このモルグが閉店することになったとき主人公・光平は『モルグ』がこの街で呼吸している数少ない店のひとつだった」と説明する。死体置き場の呼吸とは、生と死がセットになって提示されるミステリー世界ならではの発想である。

ただしポーの「モルグ街の殺人」は、東野としてはつまらない作品だったのではあるまいか。確かに死体に深い爪の痕はあるし耳障りな声を複数の者が聞いている。また容疑者が怪力の持ち主であることも明記されている。だが犯人がオランウータンだったとの種明かしは、ポーの時代だからこそ通用したのだ。そしてポーの作品ゆえに、この作品は推理小説の古典的地位を保っている。現代の科学と技術をフル活用する東野にとっては腹立たしさを越して、からかいたくなるのも無理なかならう。その結果が『学生街の殺人』のモルグ（酒場）という設定ではあるまいか。

また『超・殺人事件』（1991）の「超高齢化社会殺人事件」でも、密室殺人の謎について老

いた作家と編集者のあいだで次のようなやりとりが交わされる。

「密室を解決？ どうゆうことかな」

「ですから、種明かしをしていただきたいのです。犯人はどうやって部屋から出たのか。密室トリックを解明していただきたいのです」

「私がするのか」「そうです。だって密室トリックを考えたのは先生でしょう？」

「いや、そんなことはない。密室を考えだしたのはポーだよ。エドガー・アラン・ポー。『モルグ街の殺人』という小説でね、驚くなかれ犯人は」

「存じております」泣きたいのを我慢して小谷はいった。「文学史上、最初に密室を扱った小説は、ポーの『モルグ街の殺人』。はい、よく知っています。ただ今、私が知っているのは『モルグ街の殺人』の話ではなく、『雪の山荘資産家令嬢密室殺人事件』のことなんです。ここに出てくる密室トリックは、先生がお考えになったものでしょう？ だから先生しか解けないのです。」

結局この作家は高齢のため物忘れがひどく、原稿を書き直して完成させる編集者もまた老化しており、読者の平均年齢も76歳で前作のことはすっかり忘れていたという落ちがつく。つまり「超高齢化社会殺人事件」はミステリーではなく、近未来の高齢化社会を茶化したファルスなのだ。そこで「モルグ街の殺人」にしつこく言及することにより、この「古典」がファルスのレベルに落とされる。この手法は東野流の文芸批評としても読めるのだ。

同書の「超犯人当て小説殺人事件」でも、編集者たちによるワンパターン効果についての肯定論はファルスのものでありながら、やはり販売力をからめた現実的な文芸批評と受け止められるのである。ミステリーとファルスと文芸批評をポーは分けて書いたが、東野はこれを巧みにミックスしてエンターテインメント化することに成功した。しかしそんな東野においても、ポーの影が時として認められるのは興味深い。

### 〈猫〉

東野が三島のような猫好きに思えるのは『夢はトリノをかけめぐる』（2006）で作家業の「おっさん」の飼い猫・夢吉が20歳前の人間男子に変身する物語においてである。この二人のやりとりがテンポ良く、ほのぼのとして、しかも大いに笑わせてくれる。彼らは冬季オリンピック見学にトリノへ行き、帰国すると夢吉はまた猫に戻っている。この大枠の中でスポーツ・ジャーナリストよろしく冬季スポーツや大会についてレポートされるのだが、まったく体育会系イベントに無関心でも猫好きならばつい読んでしまうファルスの面白さを備えている。

実はこの作品は猫好き人間が「猫」に抱きがちな幻想を巧く活用しているのだ。物語の冒頭に夏目漱石の「パクリ」であるかのように断っているが、『吾輩は猫である』では猫は人間と話さない。しかし東野において読者はいきなりファルス世界に引き込まれる。ファルスでなければ「ほら話」でもいい。ここでの「おっさん」は東野と重ね合わされるが、夢吉によれば

「基本的におっさんはホラ話が得意で、事実を面白く伝えるのは上手くないのだ」そうだから。

こんな主役ではなく、いわば小道具に猫が用いられるのはガリレオ・シリーズ「霊視る」(1999)で、野良とおぼしき斑模様の子猫の写真を撮ったカメラ好きの女性が殺される。いっぽう犯人がアリバイ工作のために白いペルシャ猫を預かり、その世話係を雇うのだ。さらにガリレオ：シリーズ「壊死る」(1999)では、ロシアンブルーの首輪にブローチがつけられている。犯人が男性から贈られ、気に入らないのでホステス友達に渡し、彼女も趣味が悪いと猫につけたのだ。そしてこのブローチの材料から湯川は殺害方法を推理する。これらの「猫」は特に猫である必要はない。屋内でのペットなら小型犬でも良いはずだ。しかし猫を配置したい作家は自分の好みに合わせてしまう。いや、「猫」はポー以来、ミステリーにおける「定番」動物なのかもしれない。

『私が彼を殺した』(1997-8)でも、ロシアンブルーのサリーが登場する。駿河直之のペットだ。また野良らしき白と黒でやせた斑柄猫に神林貴弘がチーズ蒲鉾をやる場面もある。猫の世界も格差社会らしい。しかも後者の哀れな猫は毒薬の実験台として、この夜の散歩中に殺されてしまう。「猫殺し」が「人殺し」の前段階であることは現実の事件によってもよく知られている。三島の『午後の曳航』でも少年たちは、まず猫を解剖した。ポーの「黒猫」(1843)においても主人公は妻殺しの前に猫を殺す。しかも主人公は本来、猫好きなのだ。

東野における猫殺しは『悪意』(1996)においてもみられる。人気作家・日高を殺すにあたり犯人はまず日高の庭にキャットフードと農薬とを混ぜた毒ダンゴを置き、近所の猫を殺す。こちらは実験ではなく日高の評判を落とし警察に悪い印象をあたえるための布石であった。猫を殺すようなやつは残忍で、何をするかわからないと、「黒猫」で学んだ読者なら思うだろう。犯人の手記によって、これに関する情報が操作されることになるのだ。ポーの一人称語りとは異なり、東野はこの形式を対読者トリックに用いる。

現代の演劇作品がシェイクスピアに比べて優っているわけではないが、推理小説界では元祖ポーからの進歩はめざましい。すでにポーにおいても探偵が犯人というどんでん返しはある。意外性は推理小説の初めから存在しているが「名作」がたちまち「古典」になってしまうのがこの分野だ。科学技術とリンクさせやすい文学ジャンルであることも、その一因だろう。

ドイルは医者だった。ポーは理系的職業に就いたことはない。だが、チェスをする機械人形のからくりを暴いたり、SFの元祖とみなされるような月への飛行談を描く、あるいは渦に巻き込まれる物体を観察したりと、その着眼点は理系的である。もちろん当時の科学でポーの作品を裏付けて説明することはできなかった。しかし現代のミステリー作家には、通常それが求められる。すくなくとも理論的にはあり得そうな話でなければ「オカルト」とみなされる。神や悪魔、幽霊の仕業では推理小説の読者は納得しない。

## 〈分身〉

東野の少年時代に怪獣ブームが起り、彼もその熱狂者のひとりであった。ウルトラマン・シリーズではバルタン星人が気に入っていたようで、「消えたり分身の術を使ったり巨大化し

たりと、宇宙忍者ぶりを十分に発揮してくれた」（『ペギラごっこ』と『ジャミラやぞー』1993）らしい。注目すべきは、この「分身」だ。可能性は別にして、これは忍者の術として昔から日本人を楽しませてくれた、つまりエンターテインメント要素だったのだ。当然ながら東野も「分身」トリックをよく用いている。

ミステリーにおいて「ダブル」あるいはドッペルゲンガーのテーマは「陳腐」とまではいわないまでも、これもまたポー以来、多くの作家が手掛けている。変わり種はワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』で、推理小説ではないがゴシック的ミステリーという意味ではポーの「ウィリアム・ウィルソン」（1939）に近い。また「ダブル」の相手を殺す行為が自滅を意味することでも伝統的といえよう。なにしろ自分にそっくりな人間を見た者は三日以内に死ぬというのがドッペルゲンガー伝説なのだから。

ともかく「ダブル」のモチーフを用いる場合、作家は十分な独自性を披露できなければ滑稽な模倣作品とみなされるだろう。まず東野は『宿命』（1990）において、「ダブル」を意外な仕掛けとした。1985年に『放課後』でデビューした後、いわゆる学園ミステリー作家から脱皮して本格推理の実力を発揮しながらも、東野は単なる犯人当てや密室殺人の謎解きではなく、深く読者の心に残る「何か」を追究しているように思えてならないのだ。そして「ダブル」は東野にとって、現代的な説得力を備えた（読者に対する）強打となる。

書き下ろし初版本のカバーには著者の言葉として「今回一番気に入っている意外性は、ラストの一行にあります。だからといって、それを先に読まないで下さいね」と記されている。これはまさにパンドラの箱的レトリックで、よほど我慢強い読者でなければ、つい最後を先に読んでしまうはずだ。そのくらいは推理作家として想定内、いや、それをむしろ計算していても不思議ではない。その最後の一行とは、いや一行では意味をなさないので五行を引用する。

「最後にもう一つ訊いてもいいかな」

「何だい」

「先に生まれたのはどっちだ？」

すると暗闇の中で晃彦は小さく笑い、

「君の方だ」と、少しおどけた声を送ってきた。

これだけ読んでも意味不明だ。従ってこの一行を理解したいと思えば、読者は最初のページを開けることになる。「連載」ではなく「書き下ろし」において、読者を物語に引き込むための単純だが効果的な手口である。また東野は「解説」で「ぼくが一番気に入っている意外性であるラストの一行」は書く前から決めていたことを認めている。しかし、読者にとって最も心に残るラストの文章や言葉をまず決めておく、あるいはそれを書きたいからこそその作品であることは、執筆においては異例ではあるまい。オチに懸けるファルスやジョーク、落語などの「お笑い」と、最後のどんでん返しを狙うサスペンスの分野では、なおさらである。そしてはからずも、ここに東野やポーが得意とするファルスとサスペンスの共通点が見出せるのだ。

『宿命』ではかつての同級生で裕福な瓜生家の医師・晃彦に何をやっても勝てなかった警察官・和倉勇作が、殺人事件によって宿命的に再会する。しかも勇作のかつての恋人・美佐子は晃彦と結婚しているのだ。この小説では殺人事件よりも、晃彦と勇作の関係が実は二卵性双生児であり、なぜ他人として育てられたのかという経緯こそが本当の「物語」なのだ。殺人の有無は重要ではない。ただ推理小説である以上、誰かが殺される「お約束」が守られなければならないかったというだけのことである。

「ウィリアム・ウィルソン」的なのは、勇作と晃彦が、幼い頃に偶然出会ったときから、お互い相手に好意を抱けなかったことだ。「二人はしばらく無言でお互いの顔を見ていた。睨んでいたといった方が適切かもしれない」とある。そして終章で真実を晃彦から告げられた勇作は、相手に対する嫌悪感の理由を知るのだ。それは「似ていたからなのだ」。確かに友達にも二人が似ていると言う者がいて、そのつど勇作は腹を立てていた。しかし、二卵性とはいえ、両親が同じなことから似ていて当然だ。そして晃彦の方も皆に好かれる勇作に妬みを感じていた。「ウィリアム・ウィルソン」のように単純な「善」と「悪」の両極端な存在が同じ姿で出現しているわけではないが、勇作と晃彦の反目はポーのこの名作を連想させる。

また晃彦が引き取られた家の姓が「瓜生」であるのには、東野的ファルス性が感じられる。「二人は二卵性双生児で、ふつうの双子のように瓜二つというわけではなかった」と晃彦は言うが、実物の瓜にしてもなにもまったく同じに見えるわけではない。これは単なる日本語表現だ。しかし二人は似ていたのである。そして誕生直後に別々の家に引き取られた。これはあり得る話だ。とりわけ日本において双子は嫌がられて里子に出された時代もあったのだから。彼らは「瓜」程度には似ていたに違いない。それを「瓜生」が暗示しているのだ。

いっぽう『ドッペルゲンガー症候群』（1992-3）は単行本出版時に『分身』（1993）と改題されたのだが、いずれにしろ初めからネタばらしをして、居直りというか作家の自信を感じさせる。ここではまさに瓜二つの20歳の女性・鞠子と双葉が登場する。「双葉」は一卵性双生児を連想させる名だが、実は二人ともある女性のクローンだった。こうなると理論的には説明がつくが、ミステリーというよりSFに近いと読者は思うだろう。だが医学の進歩は倫理問題に妨げられなければ、限りなくこの話に近づけるのだろう。もはやダブルはゴシックのテーマではなくなったのだ。

『分身』の解説では、『宿命』刊行時のインタビューで東野が語った次のような言葉を紹介している。「初期作品のような、殺人事件があつてトリックがあつて、犯人はこの人、というような意外性だけの作品では物足りなくなってきました。……まだ試行錯誤の段階ですが、ミステリーでないと言われてもいいから、そういう作品は避けて通りたいと思っています。」

『宿命』のラストのように『分身』でも鞠子と双葉が出会う。

「こんにちは」と私はいった。少し遅れて、「こんにちは」と彼女もいった。私と同じ声だった。

そして二人は酷似したレモンをお互いに交換する。「瓜二つ」ではなく「レモン二つ」というのが、いかにも新鮮で若々しく、しかもその色が視覚的に訴える。そして最終文では「私の目の前にいるもう一人の私」と鞠子は双葉を表現する。まるで鏡を見ているようだが、鏡こそ「ダブル」を作り出す最も容易な手段なのだ。

## 〈二重人格〉

さて、江戸川乱歩といえば怪人二十面相や明智小五郎など変装の名人だったし、他人になりすますのはミステリーの常套手段だが、ポーはこれを用いなかった。日本では歌舞伎の早変わりなど、伝統的に一人で何役も演じる話に人気があったので、シャーロック・ホームズがいなくても「変装」譚は書かれただろう。しかし人格の変化については、ポーの「黒猫」の主人公や「アッシャー家の崩壊」(1839)の双生児の兄妹の異常な精神が、その後のミステリー作家に影響を与えていると思われる。

東野において、二重人格は脳科学を用いて描かれている。『変身』(1993)では、平凡な青年・成瀬純一が不動産屋に行ったところ、強盗に銃で頭を撃たれる。病院に運ばれ世界初の脳移植手術が行われる。手術は成功したものの、純一の人格がだんだんと変化してゆく。脳が純一を支配し始めたのだ。なんとそのドナーは彼を撃った犯人・京極瞬介だった。そのため瞬介の二卵性双生児の妹・亮子と純一は初対面で一体感を得、テレパシーを感じてしまう。脳手術による東野流「アッシャー家」状態というわけだ。瞬介は精神の病んだ音楽家で亮子は画家だ。二人の脳の使い方はそれぞれ音楽と美術に分かれるが、亮子にとって「あいつはあたしの一部」で「あたしもあいつの一部」だった。その「あいつ」が純一に乗り移ったのだ。「二十年以上生きてきたはずの成瀬純一は、もうどこにもいないんだ」と純一が怒る。かつて画家志望で絵も描くのが好きだったのに、その脳が音楽に取って代われようとしているのだ。そればかりか純一は狂暴性を帯び、好ましく思っていた女性に裏切られ、抱きながら殺してしまう。純一は瞬介の脳を破壊することによって、無意識のなかで生きる選択をする。

つまり精神と行動をつかさどる脳に、その身体の本来的持ち主と同じ人格を与えることによって、東野は科学的な「ダブル」を提示している。このアイデアをややコミカルに、そしてペースで味付けして短編にしあげたのが、「つぐない」(1998)である。中年男性の栗林がピアノを習い始め、子供たちに混じって発表会にまで出る。その理由は「長い間、ある男の気持ちを踏み躪ってきたので「その償いをしたい」というものだった。そしてその男とは、彼自身の右脳だった。栗林は小学生の頃、左脳と右脳をつなぐ脳梁切断手術を受け、以来、右脳の意識を無視し左脳に頼って生きてきた。ところが最近、大脳生理学者を訪れ、自分の右脳がピアニストになることを望んでいたと知るのだ。すでに東野はファルス「意外な犯人」(1992)において、やはり脳手術の結果によって生まれた別人格を犯人としており、「ダブル」をコミカルにしかも「科学的」に書いている。

脳に関わる一人二役あるいは二人一役ともいえるテーマは『秘密』(1998)でも描かれている。これは短編「さよなら『お父さん』」(1994)をもとに長編に書き改められた作品だ。平介



の妻と小学生の娘が交通事故に遭い、妻の精神と娘の肉体だけが生き残る。つまり超自然現象により妻の精神が娘に移ったのだ。姿は小学生だが精神は小学生の母というアンバランスな女性と平介は生活することになる。これも「精神」と「肉体」にそれぞれの人格を与えた東野らしいダブルの話だが、ポーにおいても「告げ口心臓」(1843)のように自分の精神の一部が自分に造反する二重人格の短編小説はある。二重人格もまた「ダブル」の一型といえよう。

### 〈ロリータ・コンプレックスと早すぎた埋葬〉

『秘密』では、妻あるいは娘が生き返ったのだが、「生き返り」もまたポー好みのテーマである。ただポーにおいて「生き返り」は「早すぎた埋葬」とセットにされるが、東野の『秘密』では、妻は死体として火葬されている。そして妻の精神もやがて娘の精神に取って代わられたかに思えたが、実は残ったのは妻のほうで、「精神的」に埋葬されたのは娘のほうだったようだ。妻の肉体が小学生の娘となり、それ以降は平介とはいわゆる夫婦生活は行われないのだが、それでも一緒に風呂に入り、夫婦としてセックスの相談をする。幼妻の連想は否めまい。

ポーは27歳で、13歳のヴァージニアと結婚したので、この作家には少女愛のイメージがつきまとう。しかも彼女が五年後に咯血し、25歳で亡くなったので、永遠にポーの若い妻の姿を印象づけることになる。

東野の『白夜行』(1999)では、少女時代の唐沢雪穂がロリータ・コンプレックスの男の犠牲になり、それが殺人者に犯行の動機を与えた。またこれは「モルグ街の殺人」にも似た意外性を秘めた密室殺人だ。犯人はオランウータンではないが、入り込めるのは条件を備えた体型の持ち主である。そして即死でなければコンクリートの建物での「早すぎた埋葬」のイメージにつながる。解剖時には、一分以内に死んだ可能性が説明されるが、10歳前後の少年と少女とが協力しても、大人の男に対しナイフで即死に至らしめるような致命傷を与えるのは難しかろう。雪穂の表情には「小学生であることも忘れさせるほどの妖艶さが潜んでい」て、少女愛の趣味を持たない男たちをも「どきり」とさせてしまうほどであった。

『むかし僕が死んだ家』(1994)では、大きな墓として造られた家を、沙也加と昔の恋人が訪ねる。生者が墓の中に入るのは「早すぎた埋葬」の一型だし、そこで記憶を取り戻した沙也加は、実は自分が久美であることを思い出す。沙也加は火事で焼死したので、その両親が記憶を失った久美を沙也加として育てたのだ。そこで彼女は久美＝沙也加という「ダブル」の存在になる。さらに久美は、6歳頃、父親に性的悪戯をされていた。それが犯人に殺人の動機を与えたという点では『白夜行』と同じである。ただしこちらは放火による無理心中を図り、本物の沙也加も焼け死んでしまう。生きながら焼かれたわけだから、まさに日本式「早すぎた埋葬」である。また埋葬をせずに死体遺棄をすることにはなるが、『赤い指』(2006)でも少女に異常な興味を持つ中学三年の男子が7歳の少女を殺してしまう。

ポーが死体の生き返りとして科学的な説明に用いたのは「ナルコレプシー」だが、東野の『パラレルワールド・ラヴストーリー』(1995)でも、この言葉が出てくる。さらには意識を失い死んだような、しかし生命維持システムで生かされ、脳波計によってそれが確認される二

人の男性の身体がある。記憶の実験台となった者たちだ。物語は人工的に記憶を操作するという現代SFミステリーなのだ。この作業によって人間の記憶が書き換えられ、同じ人間が異なった意識を持って生きる。これもまた東野流の「ダブル」といえるし「生きかえらせる」との表現も「早すぎた埋葬」の裏返し、表裏一体と考えられよう。

さて東野においてポエ的なものの集大成といえる作品が『幻夜』（2004）ではあるまいか。まず幕開きが阪神大震災の西宮だ。全壊した建築物の下敷きで救出されるのを待っている人々がいるのである。これこそ現実的な「早すぎた埋葬」である。そして強い耽美主義的欲望を持つ新海美冬は、犯罪小説の悪女らしく一人で何役もこなすのだが、そもそも彼女は新海美冬でないかもしれないのだ。そのように名乗ってはいるが、そして顔が異なることについては美を追求し整形手術を受けたと説明してはいるが、そのアイデンティティについては謎のままだ。新海美冬は二人いたとしたら、そのうちの一人は偽物であっても「ダブル」の変型と考えられよう。そもそも鏡に映るのは「虚」像であって実像ではないのだ。

また『幻夜』は『白夜行』の第二部とみなされていることから、第一部のポエ的なものがこの作品において昇華されているのは当然であろう。『白夜行』で刑事は唐沢雪穂を「悪い花」と呼んでいる。ポエの愛読者ゴードレルは、詩集『悪の華』を出したが、唐沢雪穂や新海美冬こそ「悪の華」という言葉でたとえられるに相応しい。ちなみに美冬は銀座の老舗宝石店の「華屋」の社長と結婚し、大輪の花的存在となる。そして物語は彼女の妖しい微笑で終わるのだ。

このように東野の作品にポエ的な要素が散見できる。それは理系的発想や耽美性という両作家に共通する資質のためであろう。そしてもちろん学園ミステリーや旅行ミステリーといったレッテルを貼られるのを嫌った東野が、さまざまなテーマと手法で常に創作に挑戦し続けた結果、必然的にあるいは偶然に、ポエ的なものが表れたと考えられる。だがいずれにせよポエの時代から150年を経てもなお、その影響をミステリー作家が受け続けていることの好例として、東野圭吾の名はポエ研究のページに加えられるべきなのである。

# Keigo Higashino and Edgar Allan Poe

Tamaki Horie

Keigo Higashino, who graduated from Osaka Prefecture University, is one of the most popular mystery novelists in contemporary Japan. Though he is the winner of the Edogawa Rampo Prize, we can find some Poesque elements rather than Rampo's influence in Higashino's works. Surely the title of *Naniwa Shonen-tanteidan* (Naniwa Boy Detectives) reminds us of the series of *Shonen-tanteidan* by Rampo, but Rampo took the idea from the Baker Street Irregulars of Sherlock Holmes series, and the Holmes—Watson relationship came from Dupin and "I" in Poe's mysteries.

Higashino's strong interest in Poe can be found in *Gakusei-gai no Satsujin* (the Murders in the Student Street), for "Morgue-gai no Satsujin" is the Japanese title for Poe's well known mystery of "the Murders in the Rue Morgue." In the *Gakusei-gai*, the drinking place named "Morgue" is a sort of center for the people of the street. This grotesque name is predictable for some grotesque cases. In other works Higashino also refers to Poe's "Rue Morgue" and in *Byakuya-ko* (the White Night Journey), like an orangutan in "Rue Morgue," a small boy went into the closed place for the murder.

Poe's "William Wilson" is a classical short story about "double," or doppelgänger. Though Poe's "double" is mysterious and supernatural, Higashino finds some scientific reasons for the phenomena : Twins in *Shukumei* (Destiny), clones in *Bunshin* (Doppelgänger), or the mechanism of the brain which makes "double" roles for a single person in "Tsugunai" (Compensation) or in *Henshin* (Transformation).

As Poe married 13 year old Virginia, the image of Lolita complex or loving young girls is always with him. In Higashino's mysteries such as *Akai-yubi* ( the Red Finger), *Boku-ga-Shinda-Ie* (the House Where I Died) and *Byakuya-ko*, the sexual abuses of young girls cause murders. *Himitsu* (the Secret) is not the child abuse story, but some Lolita complex implication can be seen.

Also *Boku-ga-Shinda-Ie* implies the image of premature burial which is the most Poesque theme. *Genya* (the Night of Illusion), which is the part 2 of *Byakuya-ko*, offers the scenes of Hanshin-Awaji earthquake, when a lot of "premature burials" happened under the broken houses.

The femme fatale type heroine of *Byakuya-ko* is called "a bad flower," and such is the nature of the heroine of *Genya*. The words "bad flower," in an aesthetic sense, may remind us of *les Fleurs du Mal*, the famous poetry by Baudelaire who also translated Poe's prose works into French. As the aestheticism is the core of *Byakuya-ko* and *Genya*, these works are not only mystery novels but also gorgeous femme fatale success stories.

After about 150 years from Poe's death, Higashino's works show that the ancestor of mystery novelists still gives influence over his children.